

差別魔法使いの国に生
まれまして ～クロとシ
ロの物語～

まかろん割り幼女

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

むかしむかし

魔法の国には、闇の魔法を主として使っているクロの家系と、光の魔法を主として使っているシロの家系がありました。

クロの家系とシロの家系は、お互いの方向性などの違いから、長いこと敵対していました。

そんなあるひ、クロの家系とシロの家系の所に旅人がやってきました。

旅人は、お互いの意見を聞き、少し考えたあとに

「敵対などせずに、関係性をもたなければいいんだ

今後一切、お互いに関わらなければいい」
と言ったのです。

クロの家系とシロの家系はその旅人の言う通り、お互いこれから今後一切関わらないことを誓いました。

この教えは、この後何十年と受け継がれていきます

クロの家系とシロの家系が関わることなく、平和な日々が続いたある日
クロの家系のある男と、シロの家系のある女が駆け落ちしました

彼らはどちらの家系も手が届かないような遠い遠い国へ逃げ、その後6人の子供を授かりました

シロとクロの血が混ざった子供たちは、その影響でそれぞれ違った特殊な能力を持ち、両親は少し不安を感じながらも一生懸命に子育てを頑張り、子供たちは両親を困らせるようなことも無くすくすくと成長していききました。

シロとクロの血が混ざった子供たちは、偶然か必然か、色々な出来事に会い、辛い思いをしながら、辛い世界を生き延びていきます。

ですが、それはまた別のお話。

目次

第1話

よいこのせんとうしーん

9

1

第1話

その日はきつと、運命の境目だったんだと思う。

俺はいつの間にか「無」から「シーガ」として生み出された。

本当に訳が分からなかった。

シーガの記憶が流れ込んできて、もちろん、これからやろうとしてることも、流れ込んできたんだ。

俺を、「シーガ」を、自分が異世界に行っても怪しまれないように、バレないように、都合のいいように使った、と…

何も整理がつかずに、固まっていた俺に、シーガは突然こう言ったんだ。

「俺がここを離れたら都合が悪くなるから」

「俺として、シーガとして、過こして欲しい」

思った通りだった。

こいつは、シーガは、俺を都合のいいように使う。

何も言えなかった

何を言えばいいのかもわからなくて

今更足掻いたって、もうどうせ戻してはもらえないんだって

ほぼ諦めてた

わざわざ「シーガ」をつくりなおしてくれる程、こいつは大人じゃない

それこそ、生まれたばかりの子供だって言ってもいい。

子供に、自分が嫌だからやり直してくれと、作り直してくれと言ったところで、聞いてくれるはずがないだろうと。

そして

いつの間にか

シーガはいなくなっていて

俺は「シーガ」になった。

シーガが子供だったこともあって、あまり言動などで怪しまれることは無かった。

でも、他の大人達に頼ったりしようとは思えなかった。

シーガは闇の魔法を使う、クロの家系と呼ばれる家系に生まれた子供らしく、この家系は光の魔法を使うシロの家系とは絶対関わっては行けないらしい。

クロの家系の大人達は皆胡散臭く、どこか信用出来ない。

だから俺は、少しでも反抗してやろうと、シロの家系のシヨウという子供と一緒に遊んだり話したりしてた。

…その中で

シヨウの性格の良さが、優しさが
とても身にしみたんだ

都合のいいように使われて

周りに相談もできなくて

1人で何もかもを背負ってた俺を

助けてくれた。支えてくれた。

…だから

シヨウはきつと、俺の、「シーガ」の人生の中で唯一信頼出来る存在だと思ったんだ。

それから、何十年もたった。

「シーガ」もシヨウも昔と比べたら大人になって、昔の面影を残しながらも大分変わった。
た。

シヨウは昔と変わらず、優しかった。

逆に周りの人への不信感が増えていくばかりで、シヨウ以外の人間とは必要以上に話

すことは無くなった。

「シーガ」の両親は諦めているのか構わないのか別に何も言っていないし、シヨウとの関係もバレていないらしく、平和な日々が続いていた。

なんでシヨウのような人がいるのにシロの家系とは関わっては行けない、なんてことを言うのだろうか

疑問に思っているが、考えても仕方ない。

シヨウの方もバレていないみたいだし

死ぬまでこのままがいいなと、毎晩思いながら寝る毎日だった。

「なのに、なんであんなことに？」

その日は、空が明るく澄み渡ってた

シヨウもきつとその事を言っつて、少し微笑みながら「今日は〇〇でもする？」なんて言ってくれるだろうな、と思っつていた矢先だった

シヨウが

シヨウが、街で一番目立つ処刑台のステージに

シヨウが、処刑台に

いて

なんで

シヨウが

？

シヨウ

シヨウ

関わってたのがバレた？

いや

そんなことで政府は処刑に移らない

移るわけがない

じゃあ

なんで…？

なんで

なん

あ

シヨウが

シヨウのくび

きれて

とれて

ちが

ひめいが

かんきのこえが

なんで

シヨウ

わからない

ワカラナイ

わか

わから

なんで

どうして

あ

シヨウの クビ が

ころころまわって

ころがって

ごとごとといって

おっこちて

ぐうぜん？ひつぜん？

おれの

あしもとに

あ

ないて、る

シヨウのかおが

ぬれて

ないて

…ない

シヨウ

は

もう

いない？

さよなら？

シヨウ

いやだ

どうして？

オレは

シヨウト

なかよし、で

え？

シヨウは、しよけいされ

た

？

よいこのせんとうしーん

僕は、昔死んだ。

魔法使いの国で処刑対象とされている「異端者」だということがバレて、首をサクツといかれてしまった。

その時の僕は小さかったし周りの大人からの期待？信頼？も薄かったみたいであったり見捨てられた。生きてても死んでるみたいになつまらない生活だったし、死んでもいいかなとは思ってたけど、一つだけ心残りがあった。

「シーくん」の事。

シーくんは僕の唯一と言っていい親友で、少し難アリな感じの子だけどすごくいい子だった。

処刑台にたった時にたまたまシーくんの姿を見つけちゃって泣いちゃったのはここだけの話。

そんなこんなで僕は首をチョッキンされて死んだわけなんですけど…

「久しぶりだね、シヨウ。前とあまり変わらないようにで安心したよ。いきなりなんだけど緊急事態でさ…僕の分身、っていうのかな？そいつが暴れてるみたいで…僕的能力だ

と干渉できないから、シヨウに退治してきて欲しいんだ。頼める？了承してくれるならこのまま死んだっていう事実無くしてあげてもいいよ」

いつの間にかどこかのカフェ：？みたいな所に立つてて、目の前に昔の友達であるシーガが立つてて、分身を退治しろだの死んだ事実をなくしてやるだのとペラペラ喋ってる：

脳の処理が追いつかない、まず：

僕に何が起きたんだらうか？

「いやあ、ごめんごめん！流石のシヨウでもいきなりすぎてわかんないよねー！」

僕がポカーンとしてるとシーガが慌てたように説明を始めた。

シーガの説明をまとめると：

まず最初に言った通り、シーガの分身が暴れてるらしく、全てを見通し全てを操る能力を持ったシーガだが、何故か干渉出来ず（シーガが言うには恨みか後悔か、どんな感情なのかは分からないが何かしらあつて穢れた魂が浄化されず転生もできずさまよつた結果莫大な「存在」という魔力となつてしまい干渉出来ないのではないかと言っている。よくわからない。）ある程度力を持った者、そして信頼出来る者に任せようとなつた結果僕になつたらしい。

僕としては正直二つ返事で了承するところだ。生き返らせてもらえるなんてありが

たい話で、シーくんとも会えるなら了承しない選択肢はない。

その旨をシーガに伝えるとめちやくちやに喜び、このお礼は必ずする！と言って見送ってくれた。

なんでもかなり緊急事態らしく、今は色々な魔法使い達が抑え込もうとしてるが抑えきれないらしい。

…と、言うことで僕は今不自然に歪んだ地面を見ながら少しあきれている。

「かなーり、やんちゃしてるみたいだね…普通こんな地面歪まないもんね…」

自然と大きなため息が出てくる。

確かに二つ返事で了承したのは僕だが…たった一人で大人数の魔法使いが抑えきれないような力を抑えられるのか？

シーガの話によるともうその魔法使い達は撤退してるそうだ。さらに不安が募る。

「はあくくくくく…もう一人くらいお供の心強い人くらい連れてきてくれてもよかったのに…シーガのケチ…!!」

なんて僕が言っていると、周りの雰囲気がつつと変わったのがわかった。

「…いた」

割と、思ってたより簡単に見つかった。

昔と変わらない…というか、もろシーガの姿だ。

まあ当たり前だろう。分身のようなものなんだから。

「…シーくん…お久しぶり！」

大きな声で叫ぶ。

その声に反応して、シーくんがゆっくりとこつちを振り向いて、驚いた顔を見せてくれた。

シーくんの口が少し動いた。距離があるから聞き取れないけど、多分「シヨウ…？」って言ってるんだと思う。

僕は一步一步ゆっくり歩いて少しずつシーくんに近づいて行く。

…ピタリと、足を止めた。

シーくんはまだ頭の処理が終わってないよう固まっている。

「…シーくん。いつまで固まってるの」

恐らく叫ばなくても声が聞こえるであろうところまで歩き、シーくんに話しかけた。

シーくんはハツとした顔をして、

「…なんで、シヨウがここにいるの」

「シーくんが少しばかり暴れすぎてるから、退治してきて欲しいって言われて」

シーくんの問いかけに、少しだるそうに答える。

「…たい、じ」

「そうそう。言い方悪いと思わない？いくら悪いことしててもさ、自分の分身、1部でもあ…」

僕がそこまで言った時、かなり強い衝撃が体を襲った。

何かに強く殴りつけられたような感じで、体がふわりと浮いている。痛みはもちろんあるが、それ以外にも本来受け付けるべきではない魔力を吸い続けているような息苦しい感覚が身体中にあるような気がする。

「ぐっ…うう…」

床に押し付けられるように着地し、とりあえずすぐに体制を立て直そうと立ち上がる。

顔を上げると、恐らく僕を飛ばしたであろうシーちゃんと目が合った。

シーくんは僕を睨みつけるように、確実に敵意のある目で見つめている。

「…しー、くん…」

思わず言葉がポロリとこぼれる。

シーくんがなんであんなことをしてきたのか、なんで敵意のある目で見つめてくるのか…？

そんな疑問ももちろんあるが、僕が1番驚いているのはそこじゃない。

シーくんの攻撃の威力が凄まじいことだ。

シーくんは固有能力を持ってないはずだし、僕の記憶だと実戦経験もほとんどない。シーガが言つてた魔法使い達との戦いで技術を身につけたのか、はたまた別の理由があるのか…

僕には全くわからない…が、とにかくシーくんに警戒すべきだということとは分かる。僕の全く予想できないような攻撃をしてくるかもしれないし、それにさつきもだがケタ違いの威力でやられるかもしれない。

恐らく僕に対してシーくんが敵意の感情を抱いているのは間違いない。少しずつシーくんの弱点などを探ればいいが…。

そんなことを考えているうちにもシーくんはきつと次の攻撃策を考えているだろう。とりあえず当たつて砕けろの精神だ。前言撤回みたいになるが、相手の行動一つ一つ細かく見て計算していくのは面倒くさい。

「さて…つとーシーくん…さつきのが気の迷いなら今ので許してあげるけど、どう？」
「…」

驚くほど無反応。これ、シーくん何かに取り憑かれてるんじゃないの？

そう思いながら、基本戦いの時有利になる上空へ飛び上がった。

僕の固有能力は「固形のものなんでも生み出し、操る」ことが出来る能力。

今は自分で浮かせた岩の足場の上に乗っている状況だ。

そこから一步、足を空中に突き出す。

その突き出すタイミングと同時に足元に岩の足場を出現させることで、何も無い空中で走れるようになる訳だ。

タツタツタツタツ、と軽快な足音が鳴る。

ちらつとしーくんの方を見る。

じーつと、何かのタイミングを見計らうように僕のことを見つめている。まだ攻撃はしてこないが、戦う気はあるようだ。

なんてことを思いながらしーくんを見てると

「うわっ!」

足場が突然ぐらりと動いた。

自分が足を置いて移動する際の足場は特に頑丈に空中で固定してあるからなんとか落ちはしなかったが、かなり危うかった。

しーくんか。遠距離も使えるとなると厄介な相手になりそうではある。

ジグザグに足場を作ったり、動きにフェイントをかけたりにしてしーくんを翻弄しつつしーくんの周りを走り回った。

どうしてそんなことをするかわからないと思う。傍からみたらただの変人に変わりないだろう。

でもこの動きにはきちんと意味があつて、別に適当に動いていたりするわけじゃないんだ。

シーくんの周りを一周ほどした後、僕はゆつくりと地面に降りた。

さすがにこの行動を不審に思つたらしく、シーくんは眉をひそめてこちらを見てる。

「さすがにここまで広げるとしんどいね」

僕がシーくんに聞こえるように独り言をつぶやいたその瞬間

シーくんの周りを尖つた鉄と僕の魔力で出来た攻撃結界が取り囲んだ。

「あ…!？」

「僕、遠くから魔力自体で結界を貼つたり攻撃したりするの苦手なんだよね、こうやって予め貼つておいたりしないと…さ？」

シーくんに向かって思いつきニコニコして話しかける。

「固有能力はそんなことないんだけどね。なんでこんなめんどくさい体質なんだろ？
シーくんわかる？」

…いや、やっぱりそんなことどうでもいいや。とりあえず…当たつて砕けるだよね」
そう言つて、鉄と攻撃結界を一気にシーくんに向けて攻撃させた。